

■放送を巡る諸問題検討会

…放送の様々な位相についての「考現学」的アプローチ

前川英樹(座長) 加賀美幸子 木原毅 河野尚行 今野勉 新山賢治

田中秋夫 長井展光 永田俊和 三原治 矢島良彰 渡辺紘史

※ **趣旨** 放送は言うまでもなく社会的な存在であり、その公共的役割と文化的意義は常に問われていますが、同時に放送人自身がそれを問い返さなければなりません。それは「放送とは何か」という原点を問うということになります。いうまでもなく、言論表現の自由は民主主義の根本原理であり、戦後憲法の重要な骨格を形成しています。ジャーナリストとしてあるいはクリエイティブ集団としての放送に関わる者=放送人がその意味を問わずして誰が問うのでしょうか。

「NHK 問題検討会」が手探りの中で行ってきた作業は、こうした放送人にとっての基本命題に関わるための入り口であったと思います。

では、今後はこうした議論はどのように継続されるべきなのか。

多様で同時進行的に発生する様々な問題を、間口を広くして取り組み、且つ自由な議論の場を常に機能させる仕組みは必要でしょう。また、テーマごとに自由に組み合わせられるアドホック的なメンバー構成であることが望ましいと考えます。会員外の人たちにもアドバイザーとして参加して頂きましょう。現代社会における放送の機能或いは意味について、放送を巡る制度・社会的現象・放送業界の経営構造などについて考察し議論し提言していきたいと思えます。

例えば①NHKの経営計画のように放送の公共性あるいは創造性と経営の関係、②放送法を軸にして放送の制度的在り方、③政治状況とジャーナリズムとしての放送の関係 など。以上の共通命題として「放送の公共性」があると考えます。

註:「考現学」は考古学のアプローチを逆転させて、同時代的な社会現象を多角的に考察し研究する分野として開拓された新領域あるいは方法・・・であると理解します。

以下ウィキペディア

考現学（こうげんがく、the study of modern social phenomena）とは、現代の社会現象を場所・時間を定めて組織的に調査・研究し、世相や風俗を分析・解説しようとする学問。考古学をもじってつくられた造語。